



指定文化財候補について

区分	民俗文化財
種別	無形民俗文化財
名称	大濱流灌頂
所在地	福岡市博多区大博町 8 - 5
保護団体	大濱流灌頂継承保存会

概要

大濱流灌頂は、毎年8月24日から26日までの3日間、福岡市博多区大博町で行われる。宝暦5（1755）年の水難や翌年の疫病の流行により亡くなった人々の霊を供養するために始まったとされ、行事の主目的は、新仏を含む有縁無縁の霊を弔う施餓鬼供養である。一方、過去には造り物、そして現在も掲げられる大燈籠や地区の家々で飾られる花笠燈籠など、人々の関心を集める要素が付随する形で、大規模な行事として発展し、継承されてきた。その規模から大濱流灌頂は「博多の夏祭の最後をかざる大祭」

（佐々木滋寛『博多年中行事』）とも呼ばれてきた。とりわけ縦約2メートル、幅約4メートルの大燈籠が町内の通りに掲げられる様は、大濱流灌頂を代表する光景となっている。尚、保存会所有の燈籠絵20点のうち、明治から昭和初期にかけて活躍した絵師・海老崎雪溪によって描かれた燈籠絵8点は福岡県の有形民俗文化財に指定されている。

本日の報告内容

- ① 行事の起源およびその由来について
- ② 大濱という土地について
- ③ 近代における大濱流灌頂の展開
- ④ 指定理由



①行事の起源およびその由来について

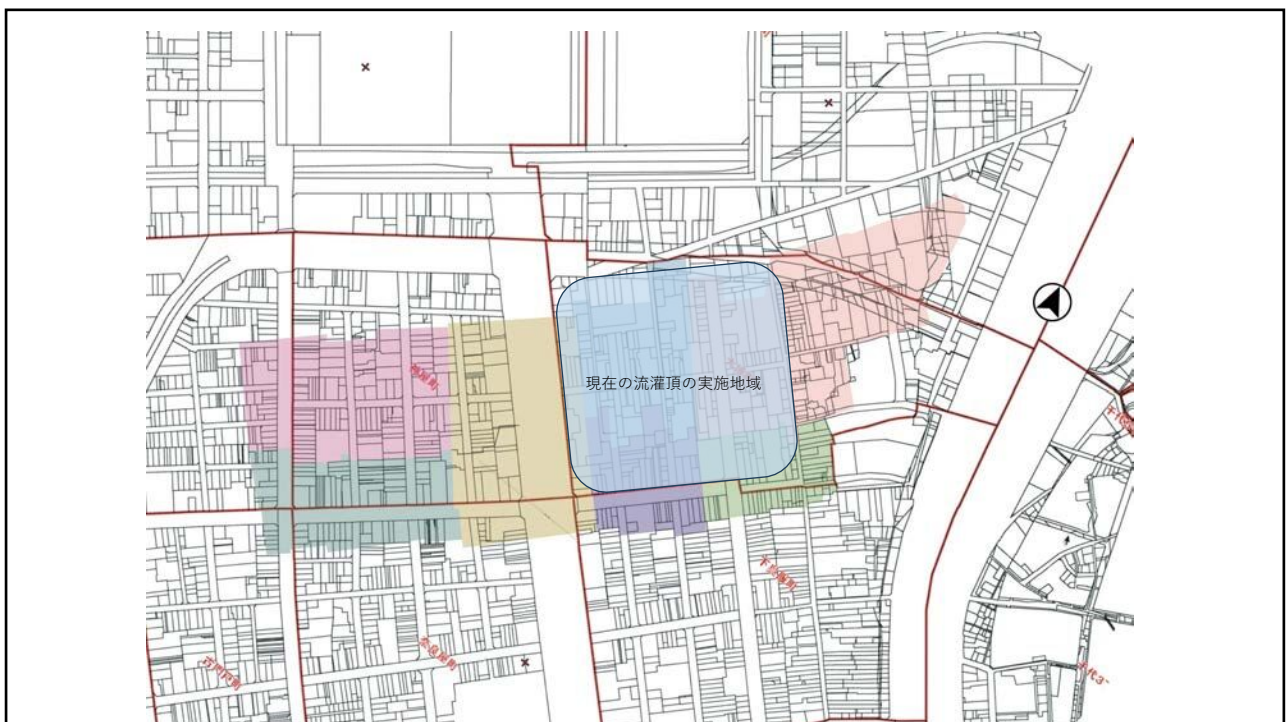
『筑前名所図会』 文政4年（1821）

大師堂ハ豎町濱にあり、寺にもあ
らず、在家にもあらず、諸人弘法
大師を信心の輩群詣す、寶曆の比
一人の行者ありて、此所に庵を結
ひて、大師の像を安置す、諸人歸
依して追々に繁昌せり、其後東長
寺に属し、七月廿五日流勧請の法
事あり、其夜ハ此邊の家々燈明茶
果を献し、偶人様の見せものを出
して、さなから盆中の賑ひに異な
らず

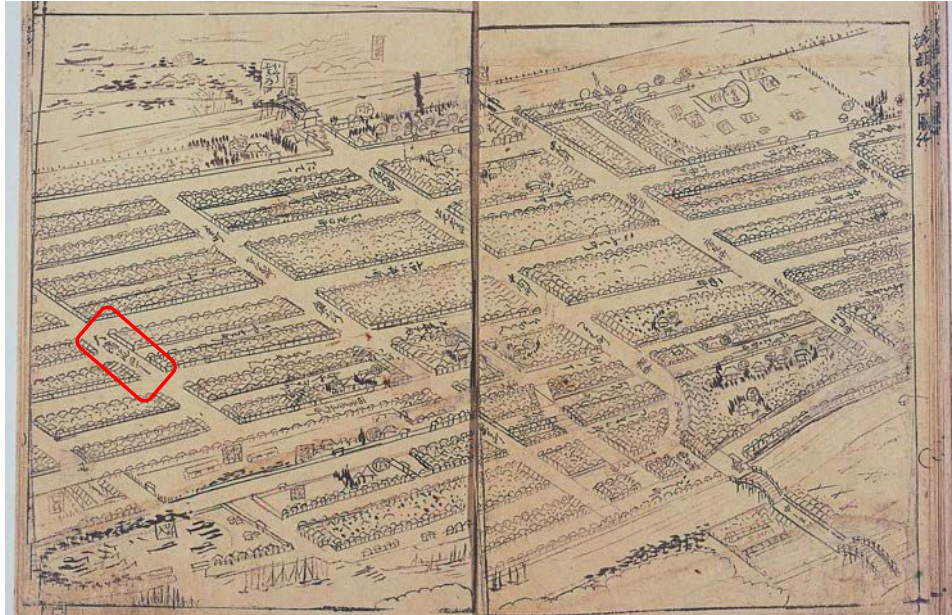
②大濱という土地 について

大濱の経済的基盤

- 元々は工業、商業、雑業、漁業などの産業が集積した町であったが、明治35（1902）年の大濱町北部の築港埋め立てにより、海岸線が消滅し、漁業・海運・木材関係の会社や商社が増えたとされる。
- 明治25年には、加勢町として参加していた「東町流」の山笠を町内に昇き入れる→「経済面で相対的に豊かであった大浜町は自分の「山」を建設するだけの力が十分にあったと考えられる」（遠城 1992：37）
- 昭和2年のデータ『福岡市商工人名録』によれば、料理・旅館・席貸・木材問屋が博多部の中でも多く分布していた。
- 『福岡県壱萬圓以上事業家資産家名鑑』（1921）によれば、大濱町（1－4丁目）が24人となっており、資産がある事業家が多かった。（遠城 1992：26-27）



「筑前名所図会」 (1821) に見える大濱



「福岡市明細図」 明治23年

流灌頂の日の柳町の賑わい

●流灌頂と柳町 流灌頂の今夜よりなるに
 柳町の遊廓は例年の通り各戸とも店先きに櫻
 の作花と飾り藝妓の名を入れたる提灯を吊るし
 て客を引く由なれば時秋なるも一時は春めき渡
 りて賑台ふ可し又濱遊には自動寫眞、活人形など
 の見せ物あり露店も所狭さまで出さる可ければ一
 段の景氣を添ふ可しと云ふ

『福岡日日新聞』明治30（1897）年8月26日

食料客よりは午前十時頃濱田警部補波
 多江刑事臨檢したるが賊は入江方の警手
 を熟知せる曲者二名が可しと留渡多江
 刑事等が前夜十二時頃上記伊勢社内を夜
 警の爲め取調たるに三人の非人が拜殿に
 横臥し居りしが此奴等は夜明けて迄も同
 所に居たりと

博多名物流灌頂

今夜が人出最多らん

博多名物の一に数へられ多年の歴史を重
 ねたりし大濱海岸の流灌頂は例年の通り

一昨二十四日より始まり本日にて終了を
 告ぐる筈なり本年は大濱尋常校々含西手
 の空地に綺麗なる施餓鬼堂を建造し民家
 より供へたる山の如き供物を積み無数の
 盆提灯を飾り各宗の僧侶是れに陣取りて
 供養の讀經を爲し市内及附近よりの参詣
 男女等夕刻より十時半頃迄續いて絶
 たず附近には女の自轉車曲乘、吉川活動
 寫眞會、八音敷く囃し立てる外時候柄の水
 水、果物、菓子、玩具店等數百の掛店や
 密接の關係ありし舊柳町遊廓が全部住
 吉に移轉してつたれば例年非常の評判
 を集めし妓樓妓嬢の諸街、飾の飾りも球
 燈も無く藝妓海飾の女郎衆の姿も見えざ
 る所から遊治郎の影も少く消えし氣な
 りしも之れは暫中洲の飢人地蔵の爲に人
 足を奪はれし故もありけん昨二日月から
 は人出頗る多くなり昨晩の如き大濱一帯
 中々に賑ひたり例年の如く今夜ありは
 人出數倍の増加を見例に依つて所摩球
 の舞踊を呈する可し

『九州日報』明治44（1911）年8月26日



「福岡市番地入実査図」第1巻、昭和2年

③近代における 大濱流灌頂の展開

東長寺文書について

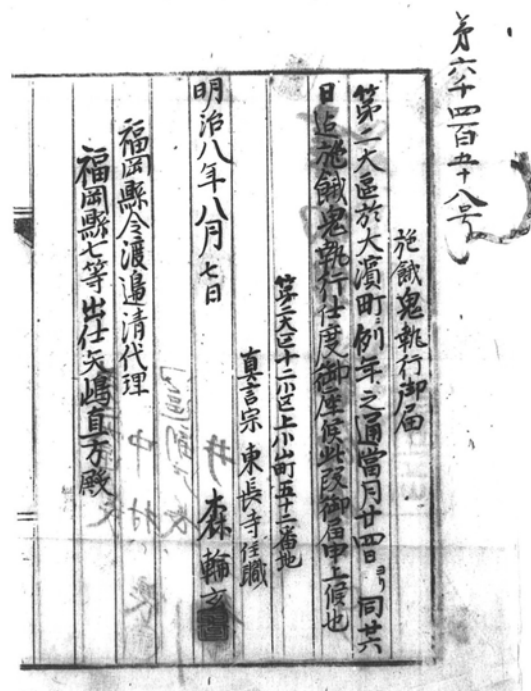
- 福岡市総合図書館蔵のマイクロフィルム収集資料
- 明治8年から大正5年にかけて大濱流灌頂に関する資料
- 施餓鬼法要にかかる『寺院出席名簿』『寺院配役名簿』『施餓鬼執行願』などが確認できる

廻り当番制の起り

其後大濱一丁目では他所見が爲れるやうに成り狭い知足庵より我が家でと家を借す事に成り遂に一丁目全体で施餓鬼を行ふ事に成り律師も問もなく地界の人と成つた。即ち始めは一丁目だけで行つた者であつた。すると年々施餓鬼の盛んに成るに伴れ費用が入る、一丁目は其負擔に堪へず、一時中止したが他の大濱三ヶ町は是を見其は殘念である。折角好い事を止すのは遺憾だ、大濱四ヶ町は山笠の當番が有るではなし、然らば此四ヶ町で廻りで行つたらばは許議一決し、三四個年の後再び始めた、是が今も七十年位の以前の事で、新しくして四ヶ町廻り當番をする事なり、年を逐ふに隨ひ盛大に赴き今日の如き様に成つた。尙是につき取説が不行願で多少誤つた事もあるうし、又補なねば成らぬ事もあるう。茲に有識の忠告を希ふする。(存丹)

廻り当番制の起り
「施餓鬼の由来 本年は百五十年目なり」
『九州日報』明治38（1905）年8月16日

施餓鬼執行御届 (明治8年から10年)



日露戦争時の日取りの変更

●大濱流瀧頂の概況 去る三日より舉行中なるが一昨四日は中日なると日曜日なるを以て其願ひ前日の比にあらす殊に遼陽占領は一入氣を添へさしにも廣き築港埋立地も人を以て満たされたり造り物は豫報せし如く九連城の大激戦にして無類の大仕掛けなり露店に當番町より三丁目の海岸まで櫛比し見世物には曲藝輕業及び女人力聲男等あり昨五日は當市一般に遼陽占領祝賀會にて休業せると提灯行列の集會所が同所に密接したるより午後四時より八時頃迄は一層の雜踏にて未曾有の盛況なりし

●流瀧頂の日延 大濱の流瀧頂は昨夕迄の筈なりしも遼陽の激戦は多數の死傷を増加したりしかば靈魂を慰むる爲め本年に限り特に今日迄日延べなしたり

『九州日報』明治37(1904)年9月6日

大規模な法要 (明治43年8月寺院僧侶出席控)



東長寺 惠光院 国分寺 宝池坊 東光院 本願院 龍花院 鎮国寺 大乘寺 遍照院 林祐範 積宏傳 山本智善 池田浄圓 浦塚覚善 江藤浄海 渡辺浄心 酒井玄明 南蔵院

廿五日

- 南蔵院
- 酒井玄明
- 渡辺浄心
- 江藤浄海
- 浦塚覚善
- 池田浄圓
- 山本智善
- 積宏傳
- 林祐範
- 遍照院
- 大乘寺
- 鎮国寺
- 龍花院
- 本願院
- 般若院
- 東光院
- 宝池坊
- 国分寺
- 惠光院
- 東長寺

大施餓鬼配役簿（明治43年8月）



古
 禮文 鎮國寺
 傳供 智善房
 散華 般若院
 誦經 蓮光院
 先言法 律長寺
 後贊 東光院
 施餓鬼 竜峯院
 伽陀 宝池坊
 祿名礼

造り物



佐々木滋寛アルバムより

「この祭の時に造られる野外の造り物の人形は代表的なもので、毎年趣向をこらしたものが出来るが、蚊帳で作った山を背景として鎧武者の奮戦の場を作ったものが多い。」

(佐々木滋寛『博多年中行事』より)

「私の家のすぐ裏が間口百間、奥行五十間位の空地だったので、そこに後藤又兵衛が籠に乗った徳川家康に日本号の槍を突きさし、数人の鎧武者が乱戦している暗がり峠の大造り物が出来て評判になったことである。人形はいずれも三米以上で、その背景の山々の高さは十米以上はあって、丸太と青竹で組まれ、山には青蚊帳が張られ、そこに飾る生松は若者達が船を仕立てて西戸崎まで伐りに行ったものである。」

(三宅安太郎 原稿「大演流灌頂」より)

灯籠絵と造り物の関係



大灯籠絵「本能寺合戦」近代（19-20世紀）竹雲

御で稱めひの患を御する

精靈流と共々博多名物の一に數へられて
その名近國に隠れ無き流灌頂は例年の如
く昨夜より大濱海岸に於て行はれ先づ大
濱二丁目海岸の施餓鬼堂にては午前十時
頃より各宗僧侶の讀經あり夜に入りては
初盆の家より奉納せる燈籠を花の如く堂
の軒先に吊し微風に輝く様美しく初盆の
家からの参詣は更なり福博市外及近村よ
り流灌頂の盛況を見んごと雲集し來るも
の數ふ可からず夜更け行くと群衆は益々
多きを加へ大濱海岸一帯は出店露店見
世物にて客引きの呼聲高く通路は各町大
繪燈籠を提げ更に家毎には軒行燈を以て
飾り夜猶晝の如く又二丁目海岸なる大仕
掛けの本能寺の造物は盛んに松火を燃さ

[illegible]

14

戦時中の中断

- 昭和58年8月の西日本新聞に40年ぶりに御神燈復活の記事
- 昭和18年あたりに、一部縮小あるいは中断か



昭和11年8月24日『佐々木滋寛アルバム』より



戦後初の流灌頂（昭和23年8月25、26日）

きようから大 聖歴年
浜の流灌頂 から例
の催しものとして陳えられてきた
大浜の流灌頂は、一時中止さ
れていたが、地元有志の發起によ
り、戦災死者の冥魂を慰めて二十
五、二十六の両日行われる

『西日本新聞』昭和23（1948）年8月25日

20年ぶりの大燈籠



武者絵も高々と
20年ぶり大灯ろう

20年ぶりに飾られた武者絵の大灯ろう
—24日午後7時ごろ、博多区大浜町の流灌頂で—

博多区大浜町に於ける流灌頂の盛況。大燈籠は、武者絵が描かれたもので、高さ約10メートルに達する。周囲には多くの観客が集まり、祭りの雰囲気が漂っている。

住宅金融公庫融資貸付
ビル入居者募集（有償バス停付）

募集地 福岡市西区新山子町1304-4
募集地 福岡市西区新山子町1304-4
募集地 福岡市西区新山子町1304-4

『西日本新聞』昭和51（1976）年8月25日

新しい大濱流灌頂の模索

同町のある大浜校区は平成三年度の児童数が百二十七人と昭和五十五年の半分になるなど、ドーナツ化現象による人口流出は深刻。流灌頂もここ数年は参加者の現象で沈滞気味だった。

そのため、五月末に同町の自治連合会役員や若手商店主らが「大浜町づくり協議会」を結成。「地域浮揚を祭りから始めよう」と活動の第一弾として流灌頂の支援に取り組んだ。今回は盆踊り大会と露店の出店を企画してまず祭りの活性化を図り、今後の町おこしの活力にしようともくろんでいる。

「西日本新聞」朝刊 平成4（1992）年8月18日

聖火で戦災者を供養、大濱流灌頂に分火、福岡市博多区

戦後五十年の節目に開かれている平和の祭典95ユニバーシアード福岡大会の聖火の一つ「FUKUOKAの火」が二十四日、戦災者などを供養する福岡市博多区の「大濱流灌頂」に分火された。（中略）

大濱流灌頂は自然災害の犠牲者を供養するため、江戸時代に始まった。戦中、終戦直後の混乱期は中断されたが、戦後は戦災者や博多港引き揚げ犠牲者を供養する行事として再開。現在まで約二百四十年の歴史を刻んでいる。

地元のユニバ開催をきっかけに、住民が「流灌頂は平和を希求する行事。同じ思いのユニバと相通じる」と、聖火の分火を思い立った。（後略）

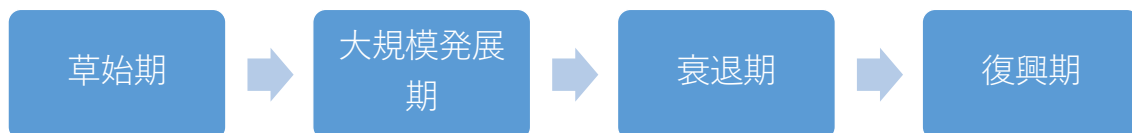
「西日本新聞」朝刊 平成7（1995）年8月25日

浜友会と大濱流灌頂継承保存会

- 平成25年度に正式に発足
- 友会は20歳以上の男性による地域組織。かつて博多祇園山笠の恵比須濱流の加勢町として参加していた子供たちを主力として平成4年に結成



近世末から現在にかけての 大濱流灌頂の展開



博多という都市において「報われない死者」を救うということ

- 近代において施餓鬼が「施食を行う善根功德をもって餓鬼の滅罪追福を図ることから転じ、震災・戦役・水害などで悲惨な死を迎えた「報われない死者」を救うという意味を持つ法会」（武井 2018：18）となっていたことを指摘している
- 博多という都市に住まう人々にとって「報われない死者」をどのように救うのかということは重要な意味を持っていた。同時にそれは都市に存在する「報われない死者」を救済することで自身が救われるという、自身の身の安全の確保とも通底しているものであった

指定理由

大濱流灌頂は、無縁の死者を弔う流灌頂や施餓鬼供養を核としながらも、大燈籠や花笠燈籠、造り物、屋台といった娯楽的要素と結びつく形で大規模に発展していった事例といえる。また、その法要の中身には、民俗的宗教観が色濃く反映されており、その姿は現行の行事にも見ることができる。

大濱流灌頂において、博多の浜部における各町内が、連携して集団的祭祀を行い、そこに多くの住民が参集することには、博多という都市に生きる人々の慰霊のあり方が表れている。さらに、平成以降は慰霊という目的を核に据えながらも、町の紐帯を再び取り戻すための目的も付与され「大濱」という町のアイデンティティとしても継承されている。

主要参考文献

- 池上良正 2014 「宗教学の研究課題としての「施餓鬼」」 『文化』 32：69－94
- 遠城明雄 1992 「都市空間における「共同性」とその変容」 『人文地理』 第44巻第3号：23-45
- 武井 謙悟 2018 「近代日本における「施餓鬼」の諸相—明治期を中心に—」 『宗教と社会』 24：17－31
- 福岡県教育委員会発行 2024 『福岡県の祭り・行事—福岡県「祭り・行事」調査事業—』
- 福岡市博物館編 2024 『特別展 大灯籠絵』
- 藤井正雄編 1977 『仏教儀礼辞典』 東京堂出版

東光院にかかる 文献史料調査

- ・福岡市総合図書館所蔵マイクロフィルム（東長寺文書）
- ・福岡市美術館所蔵（東光院旧蔵資料）

令和8年2月5日（木） 於：福岡市赤煉瓦文化館
経済観光文化局文化財活用課

目次

- ・ 1. 福岡藩の公費で営繕する社寺「御軒付」
- ・ 2. 近世の東光院の堂宇修理について
- ・ 3. 「御修理所分」（≡藩費で修理）の堂宇4か所
- ・ 4. 「御修理所」とは
- ・ 5. 「御軒付」の指定を除外された堂宇8か所
- ・ 6. 近世後期の東光院堂宇の状況
- ・ 7. 近世の東光院堂宇一覧

- 《参考》・現在の東光院の配置図
・東光院歴代住持一覧

1. 福岡藩の公費で営繕する社寺「御軒付」

(1) 「御軒附」元禄16年(1703)改定カ*・・・27の寺社が対象

箱崎八幡宮・宰府天満宮・竈門神社・宇美神社・香椎宮・住吉神社・高倉神社
・紅葉八幡宮・田嶋神社・志賀神社・志登神社・橋口天満宮・警固神社・愛宕神社
・高照山東照宮・櫻井神社・松源院・源光院・崇福寺・同開山堂・心宗庵・東長寺
・西光寺・吉祥院・少林寺・**堅粕村東光院**・吉田村鎮国寺(伊東1932、p397)

*御軒付…「社寺の藩財にて営造するを御軒附と称す。元禄十六年に定られし」

【史料1】東光院末寺の光明寺(古薬師堂)の項に「元禄十六年御軒付ヲ被為除候」とあり

*軒付け…風雨に傷みやすく目につきやすい屋根の軒先を、厚く葺き重ねること

(2) 後年追加(享保14年[1729]・延享元年[1744]ほか)

沖島神社・大嶋神社・直方多賀神社・波津妙見神社・鳥越八幡宮(鳥飼?)
・名嶋神社・伊野天照宮・雷山神社・幹亮神社・一本木稻荷神社
・香椎宮仲哀天皇宮・雲心寺・感応院・大乘寺・彌勒寺・赤幡坊・直方双林寺
・小石原行者堂

※対象寺社や仕組みの時系列の変化の説明が課題

2. 近世の東光院の堂宇修理

【史料1】東長寺文書188「御触二付書上記」

(1) 作成年代

天明4年(1784)閏正月

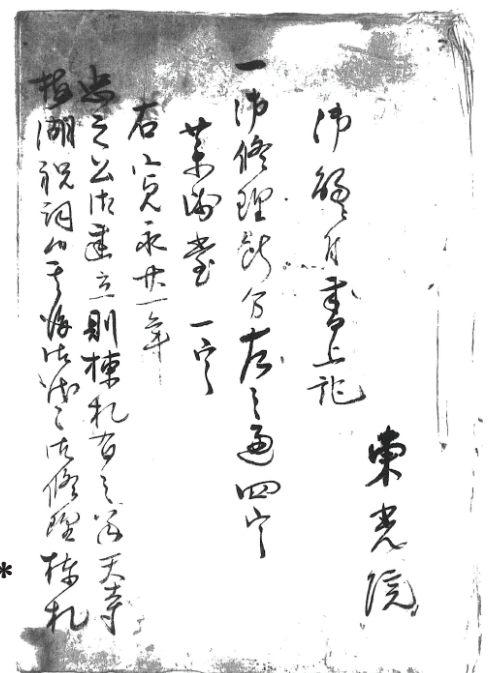
(2) 概要

天明期に藩から、修理履歴の照会があった際に東光院が回答した書き上げの控えと推定される。

(3) 伝来

江戸時代、東長寺が藩内の真言宗の触頭(ふれがしら)*の一寺院であったため伝来したと推測される。

*宗派の末寺を統制する役目



3. 「御修理所分」(≡藩費で修理)の堂宇4か所

- (1) **薬師堂**・・・寛永21年・正保元年(1644) 黒田忠之建立
棟札あり、承天寺住職代理の梅湖が祝詞奏上、その後の修理棟札あり
- (2) **客 殿**・・・寛永18年(1641) 黒田忠之建立
「〈雨戸障子〉／襖張付畳等属之」【史料1】
- (3) **仁王門**・・・寛永21年・正保元年(1644) 黒田忠之建立
仁王像2軀、古来からあり、顔色のため忠之から修補を命じられた
- (4) **鐘 楼***・・・黒田忠之建立(年未詳)
忠之が鐘を新規鑄造させて、寄付した
*「郡記録十二」(県立図書館蔵・朝倉中央図書館蔵)より補足
「薬師堂并客殿・仁王門・**鐘楼**修覆被 仰付候、此外一切寺より可致修復候事」
⇒天明4年(1784)に至るまで変わらず、藩が「御修理」している

4. 「御修理所分」とは

- 「御軒付」(藩費で営繕する寺社)のなかで「御修理所」(役所・役職) 担当の修理箇所を指す？
- あるいは、藩費で修理する(した)箇所を指す？
- はたまた両義？

(傍証)

- ①御修理所分左之通(薬師堂・客殿・仁王門・鐘楼)・・・【史料1】
→御修理所が担当している分は左のとおり
(一方で、御修理した箇所は左のとおり、とも解釈できる)
- ②曾て御修理所、中古以来御軒付 被指除候・・・【史料1】
→以前は御修理所が担当しており、少し前から御軒付の指定を除外された
(一方で、以前は御修理した箇所であるが、少し前から御軒付の指定を除外された、とも解釈できる)
- ③惣郡奉行御修理所兼帯・・・【史料2】
→**役職名として「御修理所」**があると解釈できる

5. 御軒付の指定を除外された堂宇8か所

「曾て御修理所、中古以来、御軒付被指除候堂宇分左之通ハケ所」

(1) **荒神宮并御拝** ……寛永18年(1641) 黒田忠之建立

※棟札あり【史料1】

(2) **飛来権現社** ……慶安3年(1650) 黒田忠之再建立

※棟札あり【史料1】

(3) **弁財天堂並板橋** ……慶安3年(1650) 黒田忠之再建立

御軒付の指定除外後、「今程村中より折節加修補、相續仕来候事」【史料1】

(4) **護摩堂** ……年未詳 黒田忠之建立

御軒付の指定除外後、「以後解除候事」

(5) **中門并練堀** (6) **庫裏** (7) **住持居間** (8) **廊下** ……黒田忠之建立

「寛永・慶安之間御造営被為下候、(中略)御軒付ヲ被指除候、以後為私修補加之罷在候事」【史料1】

5. 御軒付の指定を除外された堂宇

(1) **荒神宮并御拝** 寛永18年(1641) 黒田忠之建立

〈建立と「御軒付」指定除外の背景〉

黒田騒動のさなか、忠之が長谷寺(東京都港区)で開運祈願し、国元で愛宕宮を勧請し荒神宮を建立した。寛永18年の帰福後、赤坂口において荒神宮と東光院を新規造立、修法を命じた。

その後、忠之の命により堅粕村薬王寺と合併した。**綱政の代末(元禄16年^カ)に「御軒付」を指し除けされた**。修法も退転して**御宮も荒廃**したので、住持がご神体を大師堂に移した。

【史料1】

右御建立之所由は寛永年中栗山大膳奉構逆意、依之忠之公暫東国渋谷長国(谷)寺御入被遊候砌、速御開運之儀被為祈之、於御国許愛宕宮勧請荒神宮御建立、俱長日神供不怠之旨御誓被簞之、目出度御帰城之上寛永十八年於赤坂口で荒神宮并東光院新御造立・修法等ニ至迄御宿願之通被仰付置候、其後又々依 思召堅粕村薬王寺ニ御引移、両寺一所被為合之候、猶以修法不相変被仰付来候处、**綱政様御代末ニ至、御軒付ヲ被指除之**、随て修法も其節迄ニ退転仕申、遂(ニ脱カ)**御宮も朽廃候**ニ付、其節住持私ニ解除之、御神体是又為私今程大師堂ニ納簞置候事

6. 近世後期の東光院堂宇の状況

【史料3】「寺社明細記 全」（天明期記事多く、文政期の記事あり：19世紀前半成立カ）
東光院 薬王寺 20石 正保元年（1644）国君 忠之公再興

（1）薬師堂

5間四方三ツ斗作り、家上千鳥破風、本瓦葺、表7尺3寸ニ3間之御拝廻り、
内中之間3間四方猿ホウ（頬）天井折廻し1間通、板天井下拭板張り、内陣仏間
唐紙張付

（2）客殿

5間ニ6間半、家上本瓦葺、後側4尺ニ6間4尺本瓦葺、内惣様板天井下板張、
縁側三方拭板張り

（3）鐘楼

8尺四方四ツ足作り、本瓦葺、但シ流れ破風

（4）仁王門

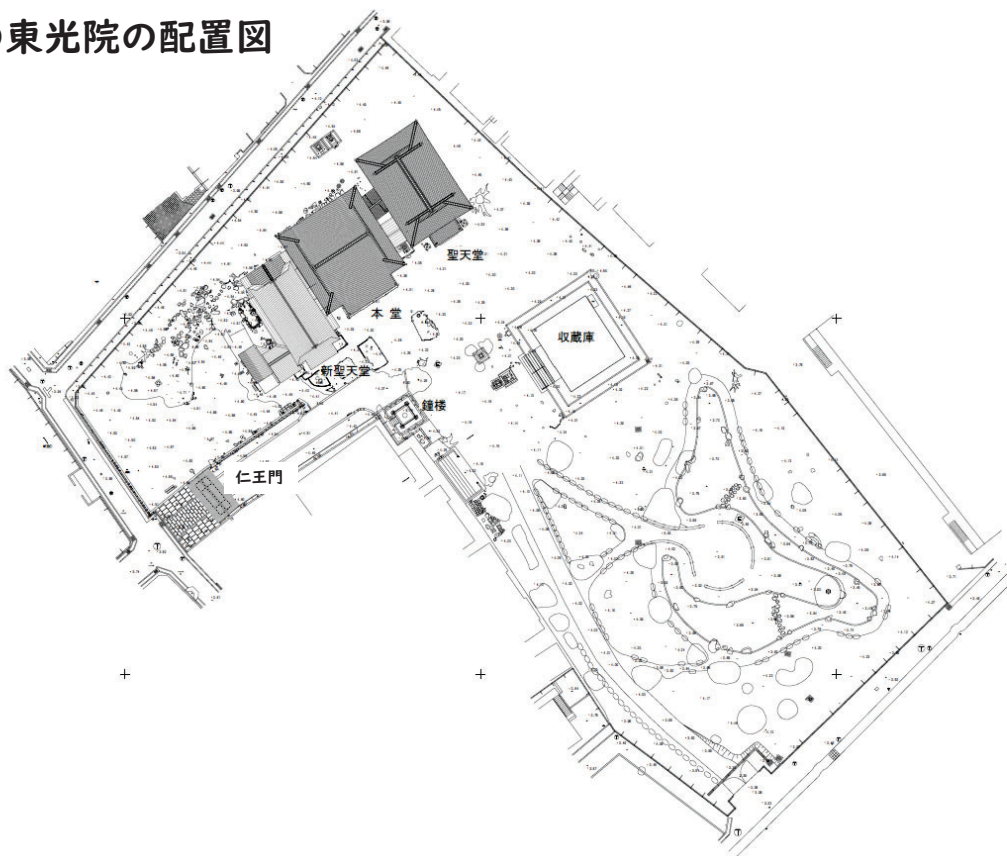
中之間9尺、妻4尺、間ニて2間ニ3間、大斗付木作り、家上本瓦葺

7. 近世の東光院堂宇一覧

典拠：主に【史料1】東長寺文書1881、
現存状況は、現在の調査による

建物名	建立年	建立時の藩主	御軒付状況	現存状況	備考
薬師堂	寛永21年（1644）	黒田忠之	建立時から？御軒付	調査中	
客殿	寛永18年（1641）	黒田忠之	建立時から？御軒付	調査中	
仁王門	寛永21年（1644）	黒田忠之	建立時から？御軒付	調査中	
鐘楼	未詳	黒田忠之カ	建立時から？御軒付	×	現存のものは近現代再建カ
荒神宮并御拝	寛永18年（1641）	黒田忠之	元禄頃、御軒付指除	×	天明4年時には既に解体
飛来権現社	慶安3年（1650）	黒田忠之	正徳以降？御軒付指除	調査中	元禄12年に綱政再興
弁財天堂並板橋	慶安3年（1650）	黒田忠之	元禄頃？御軒付指除	×	指除後、村中より修補
護摩堂	寛永・慶安頃	黒田忠之	元禄頃？御軒付指除	×	天明4年時には既に解体
中門并練堀	寛永・慶安頃	黒田忠之	元禄頃？御軒付指除	×	指除後、私修補
庫裏	寛永・慶安頃	黒田忠之	元禄頃？御軒付指除	調査中	指除後、私修補
住持居間	寛永・慶安頃	黒田忠之	元禄頃？御軒付指除	調査中	指除後、私修補
廊下	寛永・慶安頃	黒田忠之	元禄頃？御軒付指除	調査中	指除後、私修補

《参考》現在の東光院の配置図



《参考》東光院歴代住持一覧

【史料4】東光院の歴代

- ・①栄仙形俊 中興開山、承応2年(1653)7月5日寂
- ・②栄順 栄仙弟子、延宝元年(1673)12月14日寂
- ・③是因頼順 栄順弟子、延宝7年(1679)2月4日寂
- ・④栄律(智海房) 堅粕安川氏、延宝7年(1679)5月18日寂
- ・⑤応栄良伝 福岡若宮八幡正全院より移住
元和(禄カ)2年(1689)5月29日寂
- ・⑥暹教海算 享保8年(1723)閑居光明寺に住す
享保17年(1732)4月15日寂
- ・⑦芳洲泰春 東長寺照海弟子
- ・⑧豊水潭春 東長寺弟子、のち大乘寺に住す
- ・⑨潭月 東長寺弟子、のち神伝院に転住、寛政6年11月10日寂
- ・⑩賢龍 西光寺賢雅弟子、のち西光寺に転住

《参考》東光院歴代住持一覧

【史料4】東光院の歴代

- ・⑪恵旭 慈天弟子、入定寺に転住
- ・⑫儀充 天亮弟子、入定寺に転住
- ・⑬恵照 快護弟子
- ・⑭心量 大乘寺玄教弟子、大乘寺に転住
- ・⑮空津 大乘寺快護弟子、嘉永7年(1854)9月24日寂
- ・⑯大喜歡喜 東長寺亮順弟子、明治9年(1876)11月19日寂
- ・⑰蔵海円浄 東長寺亮順弟子、明治10年5月4日入寺
明治22年8月12日寂
- ・⑱摩尼亮順 東長寺摩尼宝洲弟子、昭和22年(1947)1月12日寂、75才
- ・⑲清藤泰順 もと仁和寺門跡大僧正正泉智等弟子、のち亮順の法嗣となる
昭和49年4月3日寂

参考文献・史料

【参考文献】

- ・伊東尾四郎編『福岡県史資料』第一輯、福岡県、1932 年
- ・福岡県立図書館編『関史筌蹄筑前郷土誌解題』、福岡県立図書館、1933 年
- ・筥崎宮『筥崎宮史料』、筥崎宮、1970 年
- ・大谷光男『金印ものがたり』西日本図書館コンサルタント協会、1979 年
- ・福岡市美術館 編『東光院の仏教美術』福岡市美術館協会、1985年
- ・西日本文化協会編『福岡県史 通史編 福岡藩 文化(上)』、福岡県、1993 年
- ・宮野弘樹「近世寺社の維持管理と大名―福岡藩を事例に―」2025年
(地域史料研究会・福岡の報告レジュメ)

【参考史料】

- ・東長寺文書1881「御触ニ付書上記」(福岡市総合図書館マイクロフィルム)
- ・許斐(慧)文書(筑前叢書)58「寺社明細記 全」(福岡県立図書館マイクロフィルム)

【史料2】「聖廟寶殿棟札(五)」抜粋(神道大系編纂会編『神道大系』神社編四八、神道大系編纂、一九九一年)

(表面は省略。年代は文久二年(一八六二))

(裏面)

一惣郡奉行御修理所兼帶

郡方手伝役

肥塚次郎右衛門勝寅

牧坂吉作為久

矢野太左衛門昭徳

太田彦四郎景儀

齋藤五三郎勝貞

守田作次義積

讃井彦次利知

田中藤太郎茂明

(後略)

【史料3】「寺社明細記全」(福岡県立図書館蔵 許斐(慧)文書(筑前叢書) 58)

三十四 東光院 薬王寺 式拾石

正保元年 国君 忠之公再興

薬師堂、五間四方三ツ斗作り、家上千鳥破風、本瓦葺、表七尺三寸二三間之御拝廻り、内中之間三間四方猿ホウ(頬)天井折廻し杓間通、板天井下拭板張り、内陣仏間唐紙張付、○客殿、五間二六間半、家上本瓦葺、後側四尺二六間四尺本瓦葺、内惣様板天井下板張、縁側三方拭板張り、○鐘楼、八尺四方四ツ足作り、本瓦葺、但シ流レ破風、○二(仁)王門、中間九尺、妻四尺、間ニて式間二三間、大斗付木作り、家上本瓦葺

【史料4】東光院の歴代(福岡市美術館・福岡市文化課監修『東光院の仏教美術』文献出版、一九八二年)

当寺の歴代(東光寺縁起による)

開山 伝教大師 仁和寺末寺となる
中興開山 榮仙形俊

二世 榮仙弟子 順
(延宝元年十二月十四日寂)

三世 是因頼順 榮弟弟子 堅柏安川氏
(延宝七年二月四日寂) (延宝七年五月十八日寂)

四世 榮律(智海房) 應榮良伝
(元和二年五月廿九日寂)

五世 福岡若宮八幡 正全院より移住
(元和二年五月廿九日寂)

六世 暹教海算 享保八年四月閑居光明寺に住す
(享保十七年四月十五日寂)

七世 芳洲泰春 東長寺照海弟子
八世 豊水潭春 東長寺弟子
後ち大乗寺に住す

九世 潭月 東長寺照海弟子
後ち神伝院に転住
(寛政六年十一月十日寂)

十世 賢龍 西光寺賢雅弟子
後ち西光寺に転住
入定寺に転住

十一世 惠天弟子 旭
入定寺に転住

十二世 儀充 入定寺に転住

十三世 惠照 大乗寺玄教弟子
大乗寺に転住
(嘉永七年九月廿四日寂)

十四世 心量 大乗寺快護弟子
(嘉永七年九月廿四日寂)

十五世 空津 大乗寺快護弟子
(嘉永七年九月廿四日寂)

十六世 大喜 東長寺亮順弟子
(明治九年十一月十九日寂)

十七世 藏海 東長寺亮順弟子
(明治十年五月四日入寺)
(明治十二年八月十二日寂)

十八世 摩尼 東長寺亮順弟子
(昭和二十二年一月十二日寂)

十九世 清藤 東長寺亮順弟子
後ち亮順の法嗣となる
国宝収蔵庫、聖天堂等建設

二十世 聖天祈禱建設

(『薬王密寺』所収 薬王密寺東光院発行 昭和三十五年三月)

以上
――○

天明四年閏正月

花房次右衛門殿

丹半右衛門殿

覺

光明寺分

那珂郡堅粕村

真言宗医王山光明寺当住密応

上古天台宗

中古禅宗

今為真言宗

本尊薬師如来 〈聖德太子作／白鳳二年草創〉

一古薬師堂一字并門一基

右寛永十八年

忠之様御建立其棟札略曰

那珂郡堅粕医王山光明禅寺上棟、夫■建玲瓏堂遺古仰医王仏移瑠■界

於光照衆生心施海深山高功德大天長地久為先妣大凉院殿德誉栄春大禅

定尼速証菩提立焉大檀越 源姓筑前侍従松平忠之公

皆寛永十八年辛巳秋八月吉辰

奉行〈勝野長助重則／白石権助重次〉

又元禄十二年

綱政様御修理其棟札略曰

筑前古薬師堂一字大檀那侍従

源朝臣綱政公御国家安全如意所

奉行〈吉田伝大夫重勝／杉山平内善尚〉

元禄十六年御軒付ヲ被為除候、以後頽破仕候ニ付、本寺東光院より解除申候、然処今般拙僧入院仕候ニ付、小堂二字随て住坊建立之仕、本尊奉安置之大凉院殿御位牌同前并御寄附之品檀具・仏具等東光院より致拝請候事

〈忠之様〉

一御寄附物

大凉院殿御位牌 一基

薬師尊前檀机等 一式

同 仏具 一面

已上

本寺 那珂郡堅粕村薬王寺

右之通りニ御座候、已上

天明四年閏正月 光――

弁財天堂並板橋

右慶安三年

忠之公御再建同前、御軒付ヲ被指除候得共、今程村中より折節加修補、相續仕来候事

護摩堂

同公御建立同前、御軒付被指除候、以後解除候事

中門并練堀

庫裏 住持居間 廊下

右何レも寛永・慶安之間御造営被為下候、是又同前御軒付ヲ被指除候、以後為私修補加之罷在候事

以上、今程は鐘作御修理、暫為後考記之事

〈忠之公〉

一御寄附物

薬師堂檀具一式 礼盤壹一枚

同 仏具 一面

同 戸帳 三張

右戸張ハ但、本尊・日光・月光都合三張

第八世豐水代為盗人失之、只今其

筥計相残居申候

同 護摩器 壹通

同 畳 六枚

同 鰐口 壹対

右 綱政公御寄附、享保十八年盗人

取之、遂紛失仕候事

客殿檀机 一式

同 仏具 一面

右本尊弥陀仏、右之本尊箱嶋(崎?)御宮御本地堂ニ二体被成御座候ヲ一体ハ福岡少林寺御寄附、一体ハ当寺へ御寄附之由申伝候

荒神尊具 一面

右神具追々亦紛失、唯今箱計

残居申候事

台金両界万たら 二幅

星供万たら 壹幅

荒神尊図像 壹幅

右荒神絵像大破壊(壊)仕居申候事

五大尊御懸物 五幅

愛宕尊御掛絵 壹幅

十二天御掛絵 十二幅

高野明神御掛絵 一幅

已上、現存仕居申候、乍然表具万端殊外破壊仕居申候、右之外御寄附之品多御座候由申伝候得共、不分明候故奉略候

立山五万秤(坪)

但当寺第二世栄順代於裏糟屋郡奈多浜ニて御寄附御証拠被下置候、第七世芳州代一統御改之由ニて右証拠御役所指出候、已後御返シ不被下候、其節御寺社奉行隅田清作殿より書状所持仕居申候事

史料編

【史料1】東長寺文書一八八一「御触ニ付書上記」（総合図書館収集マイクロフィルム）

東光院

御触ニ付書上記

一御修理所分左之通 四字

薬師堂 一字

右寛永廿一年

忠之公御建立、則棟札有之、承天寺
梅湖祝詞候、其後御代々御修理棟札
具有之候事

〈伝教大師御作〉

本尊薬師如来・日光・月光十二神

〈雨戸障子〉

客殿 一字 襖張付畳等属之

右寛永十八年

同公御建立

仁王門

右寛永廿一年

同段〈仁王尊二体古来より有之、顔色御上ヨリ／修補被仰付候事〉
（鐘楼脱）

同段〈鐘楼鐘新鑄御寄附被仰付／候事〉
以上、至今不相変御修理被為下候事

二 曾て御修理所、中古以来御軒付

被指除候堂宇分左之通八ヶ所

荒神宮并御拝

右寛永十八年

忠之公御建立其棟札曰

奉建立荒神堂一字大旦那国主筑前

侍従源朝臣松平忠之公御武運長久

国家安全御子孫繁栄如意祈所

抑右御建立之所由は寛永年中栗山大膳奉構逆意、依之忠之公暫東国洪谷長国（谷）寺御入被遊候砌、速御開運之儀被為祈之、於御国許愛宕宮勸請、荒神宮御建立、俱長日神供不怠之旨御誓被籠之、目出度御帰城之上、寛永十八年於赤坂口で荒神宮并東光院新御造立、修法等ニ至迄御宿願之通被仰付置候、其後又々依 思召堅粕村薬王寺ニ御引移、両寺一所被為合之候、猶以修法不相変被仰付来候处、綱政様御代末ニ至、御軒付ヲ被指除之、随て修法も其節迄ニて退転仕申、遂（ニ脱）御宮も朽廃候ニ付、其節住持私ニ解除之、御神体是又為私今程大師堂ニ納籠置候事

飛来権現社

右慶安三年

同公御再建立其棟札曰

奉再建立飛来権現宮一字大檀那

侍従松平筑前守源朝臣忠之公

御武運長久御子孫繁栄祈所

又元禄十二年

綱政公御再興其棟札文云同前